

これでいいのだ

今日 あした

その二人は、井の頭線吉祥寺行き急行のドアの横に立っていた。

男性は黒の上着にチャコールグレーの綾織りのズボンを合わせたノーマルスーツ、淡いピンクの柄織のYシャツ、ネクタイはそれよりわずかに濃いピンク。見ている私は、思わず「センス良い！ カッコいい！ 決まっている！」と思った。そばに居るのは、たぶん、その相方とおぼしき女性、何も言葉を交わすわけではないが、雰囲気似ている。

やはり、黒のざっくり羽織るタイプのノーマルスーツの下は、緑色のブラウス。ネイルも緑色、バックも緑の縦縞の大きめのシヨルダータイプのものを肩に掛けている。少し太り気味で、決して美人ではないが、魅力的だ。

今、手がけている青春物の脚本に使えそうだ。

それにしても、夫婦なのかな、恋人同士？それとも、赤の他人？これだけ相手を意識しないで同じ空気を醸し出しているのは、やっぱり夫婦？

そんなことを考えているうちに電車は吉祥寺について、ドアの近くにいた二人はさっさと降りてしまい、私は人ごみに紛れて二人を見失ってしまった。

私も婚約をしていた時期があったなあー。もう十年も前のことだ。

私、宮部かおるは、アラサー。現在、脚本を書く仕事をしている。

婚約をしたのに何故結婚しなかったのかって？

ああ、あの二人を見ていたら思い出してしまった。何だか胸がもやもやする。私も婚約者のKと一緒に、私の親友の結婚式に行ったことがあった。Kと私もあの時、親し気に言葉を交わす場面はなかったように思う。あんなことが、未だに尾を引いているのだ。十年も前に終わった婚約劇。あれで私の人生が随分変わってしまったのだと思う。良きにしろ、悪しきにしろ。

Kとは見合いをして、何回も会わないうちにとんとん拍子に話がまとまり、半年後の十月には結婚することが決まり、ダイヤの婚約指輪を薬指に嵌め、嫁入り道具の注文も滞りなく済ませていた。

Kの父は医者で、自宅で皮膚科の医院をしていた。仲人の話では、父親は東大の医学部を卒業したそうだった。

Kはあまりパツとしない私立の大学を出たごく普通のサラリーマンで中肉中背。私の印象では、育ちは良さそうだが気が弱そうだなだと思った。それでも私にと

つては十何回目かの見合いで、私自身、器量も成績も自慢できるものではなく、見合いの回を重ねる度に現実がだんだん見えて、抵抗なくこの結婚を決めたのだった。

自分でいうのも何だが、私は素直で陽気な性格で、誰とでも仲良く付き合える。Kの家族ともすっかり仲良くなっていた。

彼の父親は、自分がアレルギー体質で皮膚が弱かったので、皮膚科の医者になったそうだ。気難しい顔をしているが医院は繁盛しているようだった。彼の母親は私をすっかり気に入ってくれたようで、最寄りの駅の駅ビルにある手芸用品店で毛糸を買って、その店のスクールに通いながら、私のセーターを編んでくれた。もう嫁いでいるお姉さんがいて、Kの家に行く度にやってきては、子供のいない気楽さで、おしゃべりが尽きなかった。

そして、結婚式場も決まり、医院を兼ねた住まいの二階と一緒に住むことになった。

すると、Kが使っていた特注の大きな机が邪魔になり、誰か、貰ってくれる人はいないだろうか、という問題が持ち上がった。

そんな時、新劇の女優をやっている私の親友M子の結婚式があった。相手は同じ劇団の俳優で、二人とも、世間に名を知られてはいなかった。神社で簡単な式を挙げ、披露宴は会費制の立食パーティーだった。会費制とはいえ、来賓の中には有名な役者もいて華やかだった。

私は、彼女の劇団に度々遊びに行っていたので、ほとんどの人と顔見知りだったが、Kは自分の住むサラリーマンの世界とは全く違う人たちに驚いたようだった。私は彼と一緒に、新郎新婦に、又、その友人たちに「おめでとう」を言いながら回ったのだが、彼は持ち前の気弱な顔の中に表情を閉じ込めて、ただ私の横にいた。有名人がいても、私のような好奇心はわかないようだった。

Kは無口で表情を表に出さないタイプで、何を考えているか分からないのだが、私は彼の婚約者だというのに、そんなことを忖度する思いやりすらなかった。

今日、井の頭線でのノーマルスーツを着た、何も話さない二人を見た時、M子の結婚式の時を思い出した。あの時婚約をしていた私達には、好きの嫌いのとか、愛しているの、憎んでいるのという感情は一切なかった。もうすぐ結婚するとうときめきも相手に対して持っていなかったのではないだろうか。ただ、何時かはしなければならぬ結婚が決まったことに満足をしていた。

結婚の準備は着々と進んでいた。そしてKの家に行った時、

「あの大きな机、私の親友のM子の劇団で貰ってもらうことにしたらどうかしら」と言ってみた。

「あら、貰って下さるのだったら、良かったじゃないの」気の良い彼の母親は即座に言い、そのことにだれも反対はしなかった。

そして、その日が来た。

劇団の持っているトラックで運ぶそうで、若い劇団員の男の子が五人、一緒に乗って来た。Kの母は、何人か来ると言っていたので、おせんべいや駄菓子をとくさん用意して待っていた。

そこにぞろぞろとやって来た五人の少年はよれよれのTシャツにゴム草履履き、やぶれて肌に見えるようなジーパン姿。

「あら、M子さんは？」

Kの母は、かおるのお友達に挨拶をしようと思って、聞いてみた。

「今日は稽古があるんで来れないっす」。

少年の一人がこともなげに言った。

Kの母は机を貰いたい張本人のはずなのにと、釈然としない気持ちを持ったが、「あらそう……」と、自分の気持ちを抑えた。

少年たちは、ニコニコともてなしてくれる彼の母親と嬉しそうに言葉を交わし、「ありがとうございます」「ごちそうさまです」と、口々にお礼を言って、机を持って帰って行った。

その時、彼の父親が「何だね、君たちは」と小さくつぶやいたのだが、誰も気に掛けなかった。もちろん、私も……。

それからしばらくして、仲人さんから

「結婚のお話は無かったことにして下さい」と言ってきた。

私にとっては青天の霹靂だった。

あんなに親切だったのに…… 諍いになるようなことは何一つなかったのに……。M子の劇団の団長さんが、結婚が取りやめになったと聞いて、

「机を貰いに行つて悪いことをしたね。劇団員なんて見たことが無かったのじゃないのかな、その親御さん」と言つて謝られた。

そうなのだろうか、親切なあな家族の顔を思い出すと、人間が信じられなくなつた。たとえ服装は違つても、私にとっては、あの家族の親切や、人の良さなどの人間性と、M子の劇団の人達の人間性が異質のものだと考えられなかった。

あれから幾星霜。

何も仕事を持たなかった私は、元来、ものを書くことが好きだったこともあつ

て、劇団の団長さんとM子の好意で台本を書く仕事を得た。私は脚本の勉強をしながら人の気持ちの深読みの訓練をしている。

さて、今日の井の頭線で見かけたノーマルスーツの二人、青春物の登場人物だとしたら、黙っている二人の心の動きをどう表現しようか、夫婦より、恋人同士の方が……。そして、これから行く結婚式の二次会で新たな展開が……。忘れないうちに、今手掛けている青春ドラマのシーンを書いておこう。

ト書き

大学時代の友人同士の結婚式の場面

受付A子 あら、お二人お揃いで……。あなたたち、付き合っていたの？

男 そういう訳じゃないよ。

あ、会費、じゃなくてお祝い、よろしく。

男、袋を胸ポケットから取り出してテーブルに置く。

女 エッ、付き合っているでしょう、私達！

男に向かつて、

あなたのそういうところが不思議なのよね。

女、バッグから祝儀袋を出して、テーブルに置く。

女 A子に向かつて

結婚式のお手伝い、ご苦労様。

改めて、結婚式、おめでとうございます。

ところで、A子は、お変わりないの？

A子 あなたたち、付き合っている訳じゃないよね。

A子は、男の方に顔を移して、

私達、付き合っているのよね。

女は、寝耳に水の成り行きに、男と、A子をかわるがわる見るのであった。

続きは、又、考えよう。

脚本家には、男と女を、幸せにも不幸にもすることが出来るのよね。でも、幸せって何だろう。

かおるは過去を振り返って、

「私はこれでいいのだ」って思っている。

了